

和歌連歌
用語辭書

流木集廣注

濱千代

濱千代 清編

歌連歌
語辭書

流木集廣注

臨川書店刊

『和歌連歌
用語辞書』
流木集廣注

平成四年十月二十五日 印刷
平成四年十一月五日 発行

定価 一五、四五〇円
(本体 一五、〇〇〇円)

編者 濱 千 代 清

発行者 片 岡 英 三

印刷 ブラザー製版印刷工業

製本 新生製本株式会社

606 京都市左京区今出川通川端東入ル

発行所 株式会社 臨 川 書 店

電話(〇七五)七二一七二一
郵便振替 京都七〇〇番

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-653-02514-2 C3092 P15450E ©濱千代 清 1992

凡 例

一 本書は、万治二年写のいろは順『流木集』（解説参照）を底本とし、これを五十音順に編み直すとともに、本文について広く注を施したものである。

一 本文の翻刻に際しては、次のような方針をとった。

1 底本は一面21行前後、一行17字前後であるが、すべて項目ごとに印刷組版に収めた。

2 引用の和歌は二行書きを一行に、連歌はそのまま前句・付句二行とした。

3 濁点・句読点を付し、漢字には適宜読みがなを（ ）内に記した。また、当時の慣用仮名遣いには歴史的仮名遣いを（ ）内に記した。漢字は常用漢字を基準として現行表記に改めることを原則とした。

4 送りがなを補った場合は、その右側に・印を付けた。

5 誤脱・不審のある箇所には（ママ）とし、注において説明したが、他の伝本と校合した場合はその書名を「異本」とするにとどめた。

一 注解は、本文に番号を付し、その箇所を掲げて語意・出典等を記した。また、本文引用のほかに用いた和歌・連歌にも私解を施した。

一 本文に連歌の用例を欠く場合は、管見によって〔例句〕欄に句と出典とを掲出し、私解を添えた。

一 〔参考〕欄を設け、本文の項目に関係する諸説を、先行の歌学書から抜粋し、本文の説の背景を考えるための資料とした。また他の連歌学書の説も引き、比較勘案できるようにした。

一 本廣注の依拠した資料は、一々その名を挙げるができなかったけれども、主なものは次の通りで

凡 例

ある。

- 群書類従 日本歌学大系 新編国歌大観（万葉集の歌番号もこれによる） 日本古典文学大系
新日本古典文学大系 日本古典文学全集 貴重古典籍叢刊 連歌貴重文献集成 連歌資料集
中世の文学 古典文庫 大正新脩大蔵経 連集良材（寛永八年板） 産衣（元禄十一年板）
玉拾集（国文学研究資料館・調査研究報告十一号） 宗碩聞書（紹巴写、京都女子大学図書館蔵）
古代連歌抄（文政十二年成）

流木集廣注目次

口 絵

凡 例

本 文

あ

あがためし	3
明ぐれ	3
あけの衣	4
あげまき	6
朝がほ	7
あさけ	8
あさとで	9
あさはか	10

あさ緑	10
あさりする	11
あしづゝ	11
芦の丸屋	13
あじろ打	13
あだ浪	14
あだ人	15
あぢきなく	16
あづまの声	17
あづま屋	17
あなかま	18
あはれ	19
あふご	20
あふさきるさ	21
あまぎる	21
天津ほし	22
天の戸	23
雨となり雲と成ると云ふ事	24
雨を花の父母と云ふ	25
あやしのしづ	26
あやなし	26
あやにく	28

あやに恋しき	29
あやまつ	30
あやめもしらぬ	31
あらたへ	33
あらましかば	33
ありしよりけに	34
ありふる	35
あを馬	35
あをき紅葉	36
い	
いきす玉	37
いく薬	37
池水のいひ出る	39
いさゝ小河	40
いつきの宮	40
いつしか	42
いつまで草	44
泉河に紅葉を付くる	45
いづら	45
いで	46
糸竹	47

いどむ	47	鶯のひとく	68	おひさき	86
いな	47	うけひく	68	おほけなき	86
いなばの雲	49	うしみつ	69	おゝしたつる	86
稲むしろ	50	うしろめたき	71	おほとのおぶら	87
岩切りとをし行く水	52	うしろやすき	72	おほみ田	87
岩代のむすび松の事	53	うちみじろぐ	72	大宮人	88
岩船	56	うつし馬	72	おぼめく	88
いひしらず	57	うつせみ	72	おぼろけならぬ	89
いぶせき	58	うつたへ	74	おもなく	90
家づと	58	うみを	76	面なれて	90
家の風	59	うらがれ	77	思ひ草	91
いへばえに	61	浦嶋の子	77	思ひぐまなき	92
家を出る	61	うろの身	79	思ひつゝ	93
今こん	62	うへしうへば	81	思ひの家	94
今のはの道	62			思ひの色	96
入ぬる磯	63	え		思ひの珠	97
色草	65	枝の光	82	思ひの露	98
う		江の声	83	思ひのおや	99
萍の手向	66	お		か	
うきしづむ	67	老の坂	84	かひまみ	99
うき世のさが	67	沖中川	85	かきつばた	100

かくすをしへ	101	かはたれ時	123	草の葉山	142
かくれぬ	101	かひもなし	123	草枕	143
かげろふのもゆる	102	かひ屋のけぶり	125	くだら	144
かごと	104	かへり声	127	口のは	144
かざし	107	鴨の羽色の山	128	くみ髪をとく	145
かさやどり	108	から	128	雲鳥	145
かしは手	109	かり衣	129	くものゐ	146
霞かは	110	雁をかりなる事に詠める歌	131	雲の梯	147
かすめきこゆる	110	鹿をさして馬と云ふ	132	雲のはたて	147
風の吹きしく	111			蛛のふるまい	151
風も吹きあへずちる花	112	き		くらきに入る	152
かた糸	113	消かへり	134	くらゐ山	154
かたうづら	114	菊のきせ綿	135	くれなるの塵	155
かたへ	114	岸に南北の字	135	くれはとり	155
かたみ	116	北の藤なみ	136	くれまどふ	157
かたみの水	117	北の嶺	139		
かつみ	118	きはひ馬	139	け	
かてに	120	桐に住む鳥	140	けはひ	157
かとのきぬ	120	く		こ	
彼岸	121			こゝのかさね	158
彼仏	122	草朽ちて螢となる	141	こゝら	159
川くま	123	草の庵	142		

心いられ	160	こや	179	さとの母	201
心がへ	160	こりずま	179	さほ姫	202
心づから	161	衣しでうつ	181	さらぬ別	203
心の麻	162	衣手かるゝ	181	さをなぐるまの夢の世	204
心の嵐	163	衣の珠	182	し	
心の占	164	子を思ふと云ふに酒を付くる事	184	しかすが	205
心のくま	165	さ		(鹿をさして馬と云ふ)	132
心のしめ	166	さいつ比	185	しぐるゝと斗云ひてあかき心の歌	206
心の松、心の杉	166	さがりは	186	したつ岩根	207
心ば	168	桜麻のおふ	186	したど	208
心まうけ	169	桜がり	188	したに思ふ	208
こてふににたり	169	桜人	190	しづ心なく	209
ことぐさ	170	さゞ波	191	しづのをだまき	210
ことなしみ	171	さゝのくまぐ	193	しとゞにぬるゝ	212
ことに出でて	172	さゞれ石	194	しのに	213
木の下やみ	173	さゞれ荻	195	しのゝは草	214
恋草	173	さしいらへ	196	しのゝをふゞき	215
こひぢ	174	さしぐみ	196	しばく	216
こぼるゝ	176	さすらふ	197	しめゆふ	218
こま	177	させも	197	霜八度置く	219
駒なべ	177	さとし	201	釈教 十界歌	220
駒むかへ	177				

しらがさね	223
しらぎ	224
しら鳥	225
しらにの花	226
しるき	227
しをり	228
す	
すぐひわたす	230
すぐろのすゝき	230
すこ	231
涼しき池	232
涼しきみち	233
すだく	233
すみぞめの夕	235
炭焼くにけだもの付くる	236
皇を照る日とよめる歌	237
末の松山波こそす	238
せ	
せみのほ	241
そ	
そが菊	242
そゞろ	246
そば／＼しき	247
袖かた	247
そろおぼれ	249
空だき	250
そをだに	250
た	
たかせさず	252
たかばかりしく	253
たぎつ心	253
たくなは	254
竹の都	255
たそかれどき	256
立田姫	256
たとしへなき	257
田中の井戸	258
たなれの駒	258
谷の声	259
手ぶさ	259
玉がしは	260
玉だれ	261
玉ちる斗思ふ	264
玉の緒	264
玉ばゝき	266
たゆたふ	271
誰なれば	272
ち	
ちぐさ	273
千里	274
ちりひぢ	275
つかのま	276
月のくま	278
月の都	278
月よみ	279
つくもがみ	281
つゞらをり	283
つとめて	284

つなしにくき	285	外山	299	ならのふること	324
つまごゑ	285	とよのあかり	300	なれ衣	325
て		鳥の跡	302	に	
てふ	286	鳥のかひ	303	西より来たる法	326
と		な		庭のをしへ	327
時しもあれ	287	中神	305	新嶋守	328
とこ夏	288	中の衣	306	ぬ	
とこよの花	289	ながるゝ霞	308	ぬさととりあへぬ	329
戸ざしせぬ世	290	流木	308	ぬる玉	329
年くれてつるにもみぢぬ松	290	ながれて	311	ね	
年の内に春はきにけり一年をと云ふ歌	291	なげき	312	ねたるこゑする	331
年ののは	292	なこそ	313	の	
と柴	293	なさけを酒に詠みなす事	315	のき羽打つ	332
とすればかゝる	293	夏草むすぶ	316	のぼふる	333
とのゐ申し	294	夏引きの糸	316	野守の鏡	333
とばかり	295	夏虫	317	は	
とぶさ	296	名におふ	318	鳩杖	336
遠山まゆ	297	なにはめ	319		
灯またゝく	298	なのりそ	321		
友待つ雪	299	なはたつ駒	323		
		なやらふ	323		

鳩吹	337	一声	364	程は雲井	381
花の鏡となる水	339	人だのめなる	364	ほに出づる	381
花の古郷	339	人の日	365	ほむら	383
花まひなしに	340	人やりならぬ	366	ま	
花をかざし老のかくるゝと云ふ歌	342	一夜めぐりの神	368	まがね	384
はにふの小屋	343	人わらへ	369	まくら詞	386
はねをならべ枝をかはす	345	ひなの長路	369	枕のしると詠める	387
はゝき木	345	ひま行く駒	370	まことの言	389
はゝそをば 母によみ	348	ひもろぎ	371	正木のつな	389
葉守の神	350	ひるめ	372	ましらゝの浜	391
はやくの事	352	ふ		松風の波	392
はらへ草	353	藤衣	373	松の下紅葉	392
春の宮	354	藤を淵によめる歌	375	まとる	393
ひ		ふぎ	376	まどをの衣	394
光のかげ	356	ふり出でて鳴く	376	まほ	395
日くらし	356	ふりわけがみ	377	まぼろし	396
ひた	357	古き枕	378	み	
ひたぶる	359	ほ		三くさのたから	397
ひたやごもり	360	星をいたゞく	379	みさほ	397
ひぢかさ雨	361	ほだし	379	みさほ	399
羊のあゆみ	362				

みすの葵	400	み山木のもゆる	425	物の気	445
みだり心地	401	みわすへまつる	426	紅葉のぬさ	446
道行ぶり	401	身をしる雨	427	もろかづら	447
みづがき	402	む		や	
水に数かく	406	昔おぼゆる	429	やそ氏人	449
みつのかしはの占の事	407	六くさ	430	柳を折る	450
三の車	409	むすぶの神	431	やはのや	451
三の友	410	むまや路	432	やぶしわかぬ	453
三のはじめ	410	梅のこよみ	434	山かづら	454
三の道	411	むれ木	434	山口しるき	456
みづわぐむ	412	むらさきの衣	436	山鳥のおろの初尾	457
三ば四ばの家	414	室の戸	437	山なしの花	459
みどりの衣	416	め		山の端ちかき	460
みながら	417	目渡る鳥	438	山吹のいはぬと云ひならはしたる事	461
南の山	418	も		やみのうつゝ	463
みなれさは	418	鴬の草茎	439	ゆきがたきみち	464
身におふ	419	本あらの小萩	442	ゆきてむまるゝ	464
身のしろ衣	420	もに住む虫	443	ゆきやすきみち	466
巳の日のらはへ	421	物にざりける	445	ゆくて	466
身はならはしの	423				
都の南	424				
みやぢかよはん	425				

ゆする	466	夜るの衣を返す	487	おりはへて	510
ゆふかづら	467	夜の錦	490	奥書	512
夕されば	468	よるべ	492		
夕だつ雲	469	万代の声	493		
夕附日	470	夜るの御法	496		
夕とゞろき	472				
夕日を花の時雨とよむ	473	わ		解説	515
夕まどひ	474	若草	497		
夢がたり	474	和歌の浦にかたを波	498	索引	
夢かべ	475	我世ふくる	499	和歌・連歌・詩句索引	
ゆめになせ	477	わりなき	500	書名索引	
夢の浮橋	478				
夢のたゞち	479	ゐ			
ゆゝしき	481	井手の下帯	501		
よ		ゑ			
四の緒	481	ゑぐつむ	504		
よとで	482	を			
よどの	483	をちかた人	506		
世のうきよりは	485	をみ衣	507		
よひる	486	おられぬ水	508		
蓬が袖	486				

流
木
集

あ

一、あがためし 県召、春の除目也。秋有るをば、京官の除目にて司召と云ふ也。県召とは、田舎の人に官途を給はる事也。

のぼる春日ぞいや高くなる

② 県召去年の司をあらためて 宗砌

① 「京官の除目」——在京の諸官を任命する公事。

〔参考〕

② 「県召去年の司を」——前句の「のぼる」「高くなる」

に官位昇進を思い寄せ、春の除目により有利な任国を得たとした。「享徳千句」第六・名ウ九。前句は専順。

○『至宝抄』・「初春のことば」

あがためし 田舎の人に官途をたまはるをいふなり。あがたは田舎をいふなり。

○『匠材集』

あがためし 春の除目を云。外国官也。

一、明ぐれ いまだ明離れぬ時分、必ずくらく成る也。明闇と書く。①

① 「明闇と書く」——『万葉集』卷十・二二二九「明けぐ

れの（明闇之）朝霧隠り鳴きて行く雁はわが恋妹に告げ